

Title	7～9世紀吐蕃支配下の吐谷渾
Author(s)	旗手, 瞳
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72426
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (旗手瞳)	
論文題名	7~9世紀吐蕃支配下の吐谷渾
論文内容の要旨	
<p>本論文は7~9世紀、吐蕃支配下にあった吐谷渾人の様相を明らかにすることを目的とする。</p> <p>序論において、先行研究で述べられていることを整理し、いくつかの問題について再検討した。その中で敦煌チベット語文献IOL Tib J 1368の内容年代決定は706~714年が正しいこと、さらにダギエル (Da rgyal) 姓の人物たちの出自を特定するには、史料が決定的に不足しているため、これを吐谷渾系とみなして仮説を組み立てるのは危険であることを確認した。また吐谷渾人が集住していた地域について、チベット語史料、漢語史料から確認し、吐谷渾国 ('A zha yul) の範囲がおよそ現在の黄河最上流域から青海湖周辺、河西回廊の南にある山南地域に及び、北西では蘇干湖盆地、薩毗城で尽きると考えた。</p> <p>その上で、第一章から第二章にかけて吐蕃による吐谷渾の征服と、その後の展開を述べた。第一章では、征服と初期の支配の状況を検討した。吐蕃の吐谷渾征服とその後の軍事活動は、ガル・トンツェンと息子のチンリン、ツェンワが担うところとなったと考えられる。それは659年の吐谷渾遠征以来、ガル氏が肅清される698年まで約40年続いた。その間に、吐蕃支配下にある吐谷渾王(可汗)に吐蕃王家の王女が降嫁する一方で、「青海の軍管区」が置かれるなど、吐谷渾を軍事拠点として積極的に利用する政策が展開した。しかし、698年のガル氏肅清事件によって、それまで事実上、吐谷渾を運営してきたガル氏は徹底的に排除される。そして、この事件が契機となって吐谷渾人の大規模な離反を招いた。その結果、吐蕃による吐谷渾支配はこの時、危機的な状況に陥ったと考えられる。その後の706~714年にかけて、吐谷渾国にはド氏、バー氏、チョクロ氏といった氏族出身の大臣が、毎年のように来訪した。吐谷渾王側は、往々にして宴会を開いて彼らをもてなし、下賜品や贈り物を授与する一方で、吐蕃中央政府側の大臣たちは様々な行政措置を行った。そして714年頃には、吐谷渾を前線基地として唐に侵寇できるほどに、吐蕃の支配は回復していた。</p> <p>続けて第二章では、吐谷渾王をひとつの軸として、第一章に続く時代から、吐蕃の終焉期までの動きを追った。726年の吐蕃の河西侵攻に対抗する形で、唐軍は青海湖周辺まで侵入する。その翌年、吐蕃のツェンボが御甥吐谷渾王の対面が実現するが、これは一種の政治パフォーマンスとして演出されたものであったと推測される。しかし、その後も唐は青海に盛んに侵入し、729年には石堡城を奪取した。それによって、吐蕃側から講和の働きかけがなされ、吐谷渾国にも小康状態が訪れる。737年、吐蕃の小勃律攻撃、また吐蕃とトルギッシュとの連携によって、吐谷渾国は再び唐軍の侵入を被るようになる。それは墨離、青海湖周辺、さらに大嶺、漁海、遊奕といった吐蕃側の諸軍、石堡城、定戎城、積石軍といった地域に及んだ。そこに吐谷渾王と吐谷渾の王子たちも従軍した。8世紀後半から9世紀前半において、吐蕃における御甥吐谷渾王の序列は王妃に次ぎ、大臣より高く設定されていた。一方、実際の政治にどのように関わっていたかに目を転じれば、千戸長改廃置、千戸長の選出といった重要事は、吐蕃の中央政府において決定されたと考えられる。その過程で、吐谷渾王は候補者を推薦する業務に携わっていた。また人員差配の業務に携わっていたことを確認できる。</p> <p>第一章と第二章を通して、吐谷渾の「故地」において吐蕃がいかなる形で支配を展開したかが、おぼろげながら見えてきた。チベット本土から、ガル氏に始まり、さらにド氏、バー氏、チョクロ氏の大臣たち、さらに様々な軍司令官、行政官がその時々吐谷渾国に派遣された。彼らの何人かは吐谷渾王らと協力し、軍事、行政等各方面の職務を遂行した。それはツェンボのダルマの死をきっかけとし、吐蕃が分裂するまで続いたかと思われる。</p> <p>第三章では出土文書に現れる吐谷渾人の活動を検討した。中央アジア出土文献に、確認できるだけで十数の吐谷渾の部落の存在を確認できた。同時に、それら部落の構成員は、敦煌漢人との間で牛の売買や人身売買/交換等の形で交流を持っていたことを見て取れる。しかしそのような交流がある一方で、時に両者の間ではトラブルも発生してい</p>	

たようであり、そのような争いは吐蕃の支配が終焉してかなり時間が経った後にも発生した。それらの交流や争いは、漢人と吐谷渾人が空間的に近いところからこそ起こり得たと考えられる。

附章では、唐の支配下にあるオルドス地域の3つの羈縻州首領一族（吐谷渾慕容氏、党項拓拔氏、吐蕃論氏）の活動と就官状況を検討した。吐谷渾慕容氏、党項拓拔氏について、開元～天宝年間に首領のみならずその兄弟・従兄弟・叔父等が各種の使職あるいは州刺史を帯びて、羈縻州の管理に携わっていたことを確認できた。そこから見るに、唐朝廷は首領一族から権力を奪うのではなく、六胡州の乱後も引き続き彼らを羈縻州管理のかなめとして利用し、同時に首領及びその一族に都督や刺史、さらに各種の使職を授ける行為を通して、權威の源泉として彼らの上に立っていたと考えられる。一方、「一子出身」「強蔭」「一子の蔭」という語で示されるように、首領一族の構成員が中央に出仕する時、高位高官にあった父祖の官蔭を利用した就官を確認できた。また、この時期には、朔方節度副使に、慕容曦光、拓拔興宗、論誠節らが就任したことを確認できる。血縁関係でつながる複数の構成員に注目することによって、当該時期の首領一族は、羈縻州を本拠としつつも、唐の支配を前提とし、その制度を利用して、羈縻州、中央（朝廷）、節度衙に職を得ていたと考えられる。

史料編では、本論文で利用したチベット語史料の内、特に重要と筆者がみなしたものについて、全体の録文と和訳を著録した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (旗 手 臈)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	荒川 正晴
	副 査	大阪大学 教授	桃木 至朗
	副 査	大阪大学 教授	松井 太
	副 査	龍谷大学 准教授	岩尾 一史
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 7～9 世紀吐蕃支配下の吐谷渾

学位申請者 旗手 暲

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	荒川 正晴
副査	大阪大学教授	桃木 至朗
副査	大阪大学教授	松井 太
副査	龍谷大学准教授	岩尾 一史

【論文内容の要旨】

吐谷渾は、4 世紀以来、チベット高原東部のアムド地域（現中国の青海省および甘粛・四川省の一部）を拠点に建国していたが、7 世紀前半に唐・吐蕃（チベット）両帝国の侵攻を受けると、吐谷渾国（チベット語のアシャ・ユル）の本体は、唐へ投稿する勢力を生み出しながらも、7 世紀後半～9 世紀中葉まで吐蕃帝国に服属した。本論文は、こうした吐蕃帝国支配下の吐谷渾国の政治・社会状況について検討したものである。

序章で先行研究の整理を行うとともに、研究者間でなお見解の相違がある吐谷渾国の支配領域をまずは確定したうえで、本論の検討に進んでいる。第 1 章では、吐蕃の吐谷渾征服とその後の占領・軍事政策が、当初は吐蕃帝国の中央政府を主導していた大論（筆頭大臣）のガル氏によって握られていたことを明らかにする。この間、吐谷渾国王（可汗）に吐蕃王家の王女が降嫁される一方、吐谷渾を唐との戦鬪を支える攻撃・防衛拠点として利用する政策が展開された。やがて 7 世紀末にガル氏が肅清されると、吐谷渾は吐蕃からの離反を繰り返し、両者の関係は不安定なものとなるが、ガル氏に替わる論（大臣）の三氏が毎年のように吐谷渾国を訪問することにより両国の関係は、再び唐への侵攻基地としての役割を果たすほどに回復したとする。

続く第 2 章では、吐谷渾王（可汗）に焦点を合わせ、8 世紀前半より吐蕃帝国の終焉期（9 世紀中葉）までの両国の関係を検討する。なかでも注目されるのは、727 年に吐蕃王であるツェンボと、ツェンボと「舅甥（叔父・甥）」の関係にあった吐谷渾王との対面が実現したことであるとする。この対面は、前年に行われた唐の吐蕃帝国内に対する軍事侵攻により、吐蕃と唐との関係が急速に緊張するなか、一種の政治パフォーマンスとして演出されたものであったと推測する。その後も両帝国の攻防は断続的に継続するが、吐谷渾王と吐谷渾の王子たちは常に吐蕃側に立って従軍する。その後、安史の乱を契機に吐蕃と唐の境界が東北方面に大幅に移動したことで、吐谷渾国は吐蕃の対唐侵攻の最前線地域から後方基地へと役割を転換させたと推う。こうした状況のもと、吐谷渾王の序列は王妃に次ぐものとされ、その地位は中央政府の諸大臣よりも高く設定されていた。また吐谷渾王は実際の政治面にあっても、吐蕃の中央政府が決定する重要案件について関与していたとする。

第 3 章では、吐谷渾国を構成する吐谷渾部落に視点を移し、それらの具体的な活動の内容を検討する。まず、中央アジア出土のチベット語文書に現れる吐谷渾部落にどのようなものがあつたかを精査し、その大半を占める

敦煌オアシスの周辺に置かれていた吐谷渾部落の人々の活動を、チベット語文書を逐一解読したうえで検討する。文書内容の検討から、吐谷渾部落の人々が敦煌オアシスに居住する漢人と、静いを含め様々な交流をもっていたことを具体的に示し、漢人社会というイメージが強い敦煌オアシスの多民族社会としての一面を明瞭に浮かび上がらせる。また、彼らの生業として牧畜業のほか農業に従事するものもいたこと、また軍事活動に関わって、コータンのような遠方のオアシスに彼らが派遣されて輸送作業に従事していた事実などを指摘する。

附章では、唐の支配下にオルドス地域を拠点に活動していた三つの關隴州首領一族（吐谷渾慕容氏、党項拓跋氏、吐蕃論氏）の活動と就官状況を、主に漢文墓誌に基づいて検討する。血縁関係でつながる複数の構成員に注目し、彼らが關隴州を本拠としつつも、中央（朝廷）や節度使衙内に官職を得て、一族の繋がりを保持していたことを浮き彫りにしている。

最後に史料編として、本論で取り上げた敦煌出土のチベット語文書のうち、特に重要とされる文書の全録文と和訳を注釈を付して附載する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文で検討の対象とする吐谷渾は、同勢力が拠点としてきたアムド地域が果たしてきた地政学上の重要な役割から、多くの東洋史研究者の注目を浴びてきた。しかしながら、これまでの研究は、7世紀に吐蕃や唐が登場する前の時代を中心に、主に漢籍史料に基づいてその研究が積み重ねられてきた一方で、それ以降の時代となると、漢文墓誌が使用できる唐領内での動向を別として、チベット語文書を本格的に利用する必要から、日本では正面から取り組んだ専門研究がほとんど無いのが現状である。

本論文は、こうした吐谷渾の歴史にとって限りなく手薄となっている研究部分を埋めた点に、何よりもその研究の意義が認められる。これでようやく、吐蕃支配時期を含む吐谷渾国の歴史をトータルで論ずることができるようになったと言えよう。とくにこれまで深くは議論されてこなかった、7世紀に勃興した強力な唐・吐蕃両大国の間で果たしてきた吐谷渾国の歴史的な役割について、その検討を本格化させることができる。

また、これまで吐谷渾の研究を立ち遅れさせてきた背景に、チベット語文書の解読作業があったことは否めない。とくに、未解読のチベット語文書を引用し検討することは相当な困難さを伴うと思われるが、申請者は、古チベット語を粘り強く習得するとともに、文書を収蔵する海外の図書館や研究機関に向向いて、主要なチベット語文書を実見調査するなどの古文書学的な検討作業を地道に積み重ねてきた。その結果、古文書という生の資料を史料として利用できる状態にまで整えている。本論は、そうした努力の継続が結実した労作であり、その点を高く評価したいと思う。

ただ他方で、本論は吐谷渾国を取り上げるに際して、それを分析する視点が明確に定まっていないところがあり、そのことは本論全体の構成にも反映されている。すなわち、第1章では主に吐蕃帝国側に視点を置き、帝国として異民族である吐谷渾を如何に統治しようとしていたかを検討するのに対して、第2・3章では視点を吐谷渾国側に移し、そこから同国の政治や社会の状況を検討している。その結果、どちら側からのアプローチも中途半端な分析に止まってしまっている。またチベット語文書についても、解読にあたって求められる文献学的な検討作業に甘さが認められ、今後さらに先行研究を十分に踏まえ、より丁寧な注釈を施してゆく必要がある。このほか本論全体にわたる改善点として、特に第3章に端的に表れているように、明らかにした事実を紡いで論を組み立ててゆくスキルを磨いてゆくことが求められよう。しかしながら本論文は、解読が容易ではない古チベット語文書を史料として駆使し、停滞した感のある吐谷渾史研究に久々に一石を投じた意欲作として高く評価できるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。